



ロンダニーニのピエタ像

古代美術館の展示行程は、スフォルツェスコ城の収集品の中でも傑作の一つ、ミケランジェロ・ブオナロッチィ（1475～1564年）の**ロンダニーニのピエタ像**で締めくくられる。

1952年に市立美術収集が購入し、1956年に城の博物館が戦後初めて再館された機会に展示された。

離れた空間にこの作品をさも大げさに配置したのは、訪問者に一種の緊張を醸し出し、傑作を近くで鑑賞することによって期待に震える好奇心を満足させることを意図したからである。

古代ローマ時代の台の上にこの大理石作品を配置したのは、城のピエタ像の慣例的呼称の由来ともなったロンダニーニ家のローマの邸宅に置かれていた記憶を残すためである。

ロンダニーニのピエタ像は、ミケランジェロの体内から産み出された素晴らしい表現である。キリストを抱き悲しむ聖母マリア、つまり、ピエタという主題を特殊な扱い方をした新たな解釈で表現し、丹精込めてつくられた傑作である。

いつもは習慣的に仕事を早く完成しているのとは大きな違いで、巨匠は長い年月を費やし、1564年2月18日の死の数日前までピエタの制作に専念していた。

このイメージが現実のものに相当するという証拠はないが、実際、巨匠はこの未完の作品を自分の住まいに置き、遺産として忠実な下男アントニオ・デル・フランチェーゼに残したことが、死の翌日に書かれた身の回りの財産目録に記されている。

オックスフォード市のキリスト・チャーチ・カレッジ学校に保存されているいくつかの巨匠の習作を通して解ったことであるが、今日見る通りのロンダニーニのピエタ像は、元来のものの次の段階の解釈で、おそらく1552年ぐらいに始められたものであろう。

最初、キリスト降架を制作しようとしたミケランジェロは、ピエタの初めの解釈から命の絶えた息子の体を持ち上げる聖母の像へ彫刻を移した。その最初の作品、つまり原型は、



ロンダニーニのピエタ像



今でもよく認めることができる。滑らかなキリストの足や体から外れた右腕、そして聖母の頭の左側に見える鼻と目などは、初めに粗削りした聖母の顔として納得できる部分がわずかに認められる。

つまりミケランジェロが最初に草案したピエタ像のキリストの体は完成していたが、聖母はまだ粗削りのままだったということである。

1970年代に何かのきっかけでキリストの頭の部分だけがローマで発見された。これはロンダニーニのピエタ像の元の部分ではないかと思われ、ピエタの原案と引き合わせてみると、正確に一致した。何人かの専門家はそれで立証されたものとしているが、この符合はいづれにせよ充分とは言い難い。

1555年頃、巨匠はこの構成を再検討し、第二のピエタ像の制作を打ち出した。姿は最大限に伸ばし、締め付けられる様な苦悩に満ちた抱擁を表した。

次にミケランジェロは、破損したキリストの右足部にみるように、基部にあった彫刻群をとり除き、そして、今日

でもピエタ像の下方にみられる文字を刻んだ。この第二のピエタ像の制作にあたって、ミケランジェロは像に採用した新しい姿勢と釣り合うように、既に完成したキリストの足を利用し、取り入れた。

そして母親の右肩をつかって息子の新しい顔を刻んだ。体の後にはっきりと見える第二の手があることで立証されるように、初めの構図の右腕は取り除かれ、代用されるはずであった。

第一の構想の腕の断片は、しばしば、それぞれミケランジェロの作品を未完として決定付けるかのごとく受け取られてきたが、おそらく、もっと現実的に、この断片は、巨匠がピエタ像の第二の構想を実現するための、単なる純粹で素朴なよりどころであるとみななければならないのではなかろうか。

ロンダニーニのピエタ像は、つまり、一種の重ね書きで、前の印しを部分的に消した上に、新しい題材を描く。元の構成の残りは、単に必然的に仕事の終了とミケランジェロの死とが一致したために、未完とみなされたにすぎないとも言える。



ロンダニーニのピエタ像、部分